おけとものがたり vol.34

電化

置戸では峰村電気で供給

電灯が普及する前の時代に広く使用されていた石油ランプ（町郷土資料館所蔵資料）

置戸で電化が実現したのは、大正６年に峰村電気株式会社が置戸市街に電気供給事業を開始したのがはじまりです。

峰村電気株式会社は、現在の置戸中学校校庭付近にあった桑島経木工場を買収して、峰村電気製材合名会社として発足。常呂川に丸太などで段差をつけ、そこにタービン式水車50馬力をすえて発電し、昼は経木（きょうぎ）や製材の工場などに利用した後、夜は置戸市街に供給していました。当時、鉄道線路より南側の工場地帯は、それぞれの工場における余剰電力を、社宅、工場、事務所などへ供給していたので、峰村から供給を受けていた家は商店を中心とした北側のみで、戸数としては少ないものでした。

峰村電気時代は幼稚な発電施設であったため、たとえば秋になると鱒（マス）や鮭（サケ）がのぼってタービンに触れると電力が下がり、市街では電灯が暗くなると「また鱒がかかったな」と語りあったといいます。また、冬は水路が凍り、タービンの回転が止まるので、一晩に何度も熱湯をかけてタービンの結氷を防いだなどというエピソードも残されています。

大正11年には、台風で増水し常呂川の堤防が決壊するなどの大水害があり、これにより峰村電気株式会社は決定的な打撃を受け、廃業。その後は、大和木材株式会社電気部が引き受け、50馬力35kwの発電機を動かしましたが、この頃から電気会社は大資本の小規模会社吸収時代に入り、同13年には富士電気株式会社が大和電気部を買収。１年くらいは既設の設備が利用されましたが、その後は留辺蘂、秋田経由で送電線が引かれ、本格的な水力発電所から送電されることになり、経営も周辺町村同様に大日本電力の手に移っていきました。

昭和６年から上置戸、境野市街にも電柱が架設され、一応、市街地の電化は完了しましたが、農家地区の電化はしばらく後回しにされ、結局実現したのは戦後のこととなりました。

（参照：置戸町史、置戸町史上巻）

きらりっ！

旭日単光章を受章した

岡田（おかだ）　良助（りょうすけ）さん

春の叙勲で旭日単光章を受章した岡田良助さん。昭和46年に、町選挙管理委員会委員に選任されて以来、７期28年の長きにわたり、適正な選挙事務の管理執行に貢献。うち２期８年間は委員長も勤め、境野公民館長、町社会教育委員、町青少年問題協議会委員などを歴任。町役場で行われた伝達式では、山中オホーツク総合振興局地域政策部長から勲記と勲章が手渡され、立ち会った井上町長からも「長い間、明るい選挙の推進にご尽力いただき感謝しています」と祝福を受けました。選管委員長時代には、一票差で当落が逆転するという事態も経験し、「疑問票の判断はいつも大変でした」と苦労も多かったようですが、それでも「生きている内に叙勲されるなんて思ってもみなかった。とても光栄です」と喜びを語っていました。置戸町豊住在住。87歳。